

「SAT テクノロジー・ショーケース 2026」で発表しました

農地基盤情報研究領域 地域防災グループ研究員 吉澤剛禎

2026年1月22日、つくば国際会議場で開催された「SAT テクノロジー・ショーケース 2026」(主催：つくばサイエンス・アカデミー、協力機関：産総研)に参加し、「非破壊試験機による地すべり抑止杭の破断推定モデル試験」についてポスター発表を行いました。インデクシングは、2月末までHPで(<https://www.science-academy.jp/showcase/25/index.html>)アーカイブ配信されています。

地すべり抑止杭の健全性評価が必要とされる背景

日本国内の地すべり防止区域は、農林水産省農村振興局・林野庁・国土交通省の3省庁によって所管されています。このうち、農村振興局が管理する約2,000か所の防止区域だけでも、約13万本の抑止杭が築造されています。しかし、これら膨大な土中の杭工に対して、有効な健全性評価手法はありません。そのため、杭工の状態を適切に把握できる非破壊評価技術の開発が求められています。

今回のポスター発表では、既存のコンクリート杭の品質管理に用いられている非破壊試験手法が地すべり抑止杭の健全性評価にも適用できるか、模型実験により検討した結果を紹介しました。本研究は、現場運用を見据えて、できるだけ簡便な手法の確立をめざすものです。具体的な内容については、当日のアブストラクト (https://www.science-academy.jp/showcase/25/pdf/P-120_showcase2026.pdf) やポスター資料 (https://www.science-academy.jp/showcase/25/pdf-p/P-120_p_showcase2026.pdf) をご確認ください。

異分野交流から得られた気づき

これまでも複数の専門学会で発表してきましたが、異分野の研究者、行政関係者、企業技術者、学生など、分野横断的な参加者が集まる場で発表するのは今回が初めてでした。

会場では、国土交通省の研究機関の職員とも意見交換する機会があり、技術の応用可能性や連携について議論する貴重な機会となりました。

また、本イベントでは高校生から社会人研究者まで幅広い発表があり、高校生の研究は教科書を超えた独自の視点を感じられ、研究者の発表では社会実装に迫る技術が多数紹介されており、立場・年齢を超えて多様な刺激を受ける場でした。

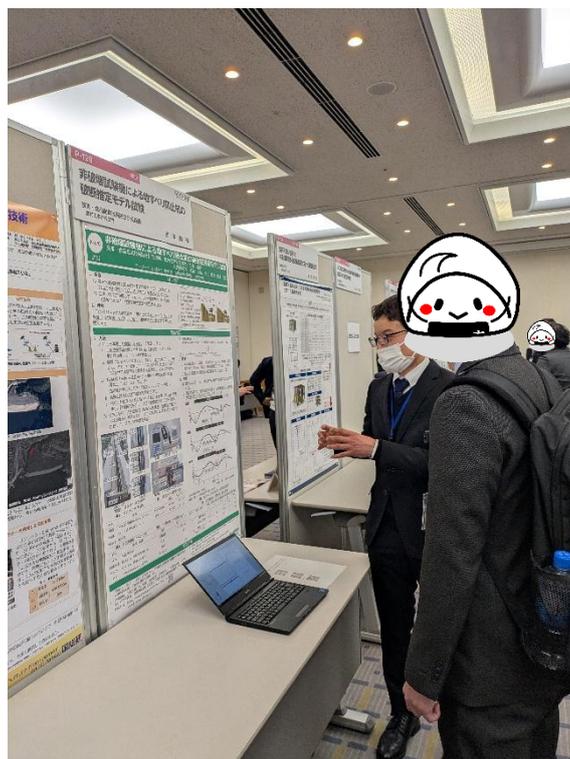
今回の発表を踏まえて

次回の発表に向けては、今回の経験を踏まえ、異分野の方でもイメージしやすいよう、模型を使った理解しやすい発表に取り組みたいと考えています。

来年度の協力機関は農研機構とのことです。読者の皆さまの中で、あるいはご家族の中で、「異分野の人たちと交流しながら研究を発表してみたい」という方がいらっしゃいましたら、秋ごろに発表の募集が行われるはずですので、ぜひ応募をご検討ください。当日発表を聴講するだけでも刺激を受けた上に、あなたの知見が誰かの役に立つと思いますので、ぜひ会場までお越しください。



インデクシングを行う著者



ポスター発表を行う著者